

---

# 侵入

R-third

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

侵入

### 【Nコード】

N6504S

### 【作者名】

R - t h i r d

### 【あらすじ】

1ヶ月前に別れた恋人の、部屋の合い鍵。

わたしはそれを返すべく、ヤツの部屋に向かったのだが・・・。

「うわあああああ〜〜〜っ！！！！」

自分の部屋でごろりと寝転がり、天井を見上げて叫んだ。

仕事だ遊びだと、バタバタと無理矢理予定を詰め込み、忘れようとしたけど、やっぱり無理っ！

…なんだかんだ言いながらも、わたしはまだ別れた恋人の事を、忘れることが出来ないのだ。

「これ、どうすっかなー…。」

右の掌には、アイツの部屋の合鍵。

結局返しそびれて、1ヶ月近く持ったままになっている…。

「暇だし、さすがにそろそろ返しに行くか…。」

むくりと起き上がり、わたしは少し厚手のパーカーを羽織った。

久々に訪れる、ヤツの住むマンション。

5階建てのその建物は、お世辞にもきれいだなんて言える代物ではなく、今時標準装備ではないかと思われるエレベーターすら、設置されてはいない。

階段を1歩、2歩と上がる度、まだアイツが自分の恋人だった頃の思い出が蘇る。

初めてキスしたのも、思えばこの階段だった。

大好きだよって言うてくれて、わたしも、って答えて。  
手を繋いで、子供みたいに幸せそう笑ってた、あの冬の日。

真夏の馬鹿みたいに暑い中、二人で買い物袋を手に、ヤツの部屋に  
向かった日。

…大ゲンカして、泣きながら一人、彼の部屋を飛び出した最後の日。

「…まあ、来たところで、何って事もないんだけどさ。」

ヤツの部屋の前で、ぽつりと呟いた。

右の掌には、まだ部屋の合い鍵が、握られている。  
そつと掌を広げ、それを見つめる。

ポストにこれを入れれば、全てが終わる…。

わたしは気づくと、キーをドアの鍵穴に差し込んでいた。

「入った…。」

ドアの鍵は案の定、替えられてはいないようだった。

ガチャリと音を立てて、回転する鍵穴。

それを見た瞬間、ダメだと思いつつも、笑みが零れた。

「…この時間なら、まだ仕事だよね。」

脳裏に浮かぶ、悪い考え。

これは不法侵入にあたる、犯罪行為だというのに、わくわくの方が  
大きくて。

…わたしは、ヤツの部屋に侵入した。

久々に入るアイツの部屋。  
ふと思い立ち、冷蔵庫を開けてみた。  
その中は予想通り、ほぼ空っぽで。

「ホントほつとくと、杜撰ちやうな食生活を送るんだから…。」

呆れながらも、女の影がない事に、少しホツとしている自分。  
冷蔵庫のドアをぱたんとしめ、次に冷凍室を開けた。

中は冷蔵庫同様、ほぼ空だったけれど、わたしが大好きな、ハーゲンダッツのアイスクリームだけが、ぼつんと寂しそうに入っていた。

「…まだ、残ってたんだ。」

わたしはあの濃厚な味が好きだけけれど、ヤツはもつとチープな、ソーダ味の棒状のアイスが好きだった。

だからわたしがこの部屋を訪れる事が無くなった今、それを食べる者はおらず、ずっと冷凍室の中で、眠っていたのだ。

そのひやりと冷たい紙製のカップを手にとると、思わず笑みが零れた。

まだここが自分の居場所であるような、そんな気持ちになれたから…。

「どうせこのまま置いておいても、誰も食べないんだし…。」

言い訳のようにそう呟くと、ほんの少しの悪戯心を胸に、キッチンからスプーンをひとつ取ってきて、アイスクリームの蓋を開けた。

「…いただきます。」

わたしの指定席だった一人掛けのソファに腰を掛け、両手をぱちんと合わせる。

アイスにスプーンをさそうとしてみたけれど、長期間冷凍室を独占していたそれはかちんかちんに固まっていた為、なかなかささらなかつた。

それでもようやくひとさじ分のアイスクリームを掬い取ると、それを自分の口元へと運んだ。

「うん、うまい！」

これを見るとヤツとの楽しかった頃の記憶が蘇ってしまったから、意識的に食べることを避けてきたバナラ味のアイスクリーム。久々に口にしたそれは、悲しみではなく、幸せの味だった。

アイスクリームを食べ終わると、わたしはそのゴミの処理に迷った。

「さて…。どうしたもんかな。」

これをゴミ箱に置いていく行為は、かなり危険といえるだろう。だって、家主不在の間に、元恋人が勝手に部屋に侵入した、証拠を残す事になる。

でも…。

わたしはニヤリと笑い、敢えてそれを目に着きやすい、キッチンのテーブルの上に置き、部屋を後にした。

それから数日後、わたしは再びヤツの部屋に向かった。

前回同様、勝手に部屋の鍵を開け、中に侵入する。  
そしてまたしても勝手に、すでに空っぽである冷蔵庫の中を物色したのだが…。

「あれ…？」

中を覗いた瞬間、思わず声が出た。  
空っぽだと思っていた冷凍室には、6個入りのハーゲンダッツのアイスクリームの箱が、あった。  
そしてそれには、こう書かれた貼り紙が…。

『家主不在時は、勝手に食うべからず。  
必ず許可を取ってから！』

それを見た瞬間、わたしは言葉を失った。  
それは、つまり…。

「何よ、えらそうに。  
いないのが、悪いんじゃないっ！」

嬉しくて泣きそうになりながらも、わたしは一人、悪態を吐いた。  
そしてまた勝手にその箱を開け、アイスクリームを食べた。

それからそういったやりとりが、4回程続いた。  
わたしはいつもの様にヤツの部屋に向かい、いつもの様に勝手に冷凍室のドアを開けた。

アイスを取り出した、その時だった。  
…いきなりグイッと腕を引っ張られ、背後から抱き締められたのは。

そして次の瞬間感じたのは、懐かしいヤツの匂い。

「不法侵入者を、やっと捕まえた…。」

それとアイス、勝手に食うなつて書いてあつただろ？」

見上げるとそこには、悪戯っ子みたいに、でも優しく微笑むアイツの笑顔。

「あ…。」

小さな、言葉にもならない声が零れた。

それを見てヤツは、可笑しそうにクスクスと笑い、言った。

「つたく、いつ来るかと思って、3日も有給使っちゃったじゃん。

責任、取ってくれよな？」

「責任つて…。」

まだ呆然としながらそう呟いたわたしを、ヤツはさらに強く抱きしめた。

「そつだなあ…。今日は一日、付き合ってもらおうか？」

…いや、今日だけじゃ駄目だな。これから一生、かなあ？」

尚も笑いながら、ヤツは言った。

わたしは逆に泣きそうになりながら、再び彼の顔を見上げた。

するとアイツは真剣な表情に変わり、わたしの瞳を見詰めながら言ってくれた。

「…お前の事が、やっぱり好きなんだ。



ずっと一緒にいてくれないか？」

・・・FIN

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6504s/>

---

侵入

2011年4月24日10時45分発行